



講演会・講演要旨

「近代日本社会の創造者 渋沢栄一をさぐる」

講師：井上 潤 氏

公益財団法人渋沢栄一記念財団業務執行理事
渋沢史料館館長

只今ご紹介賜りました、渋沢栄一記念財団渋沢史料館の井上でございます。本日は渋沢栄一という人物について掘り下げていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

さて、今、司会のほうからご案内ありましたとおり、2024年の上期に渋沢栄一肖像の新しい1万円札が発行されます。そして、大河ドラマの主人公にも決まるということで今本当に注目を浴びているような感じでして、私もほぼ毎日のようにどこかしこで渋沢栄一について語っているところです。そういった時だからこそ、改めて渋沢栄一という人物の真の姿、実像を、しっかりお伝え出来る良い機会が巡ってきたというふうに思っている次第です。



2018年にこの写真を私どもの館から国立印刷局にお貸したところから今日のブームといえますか、大注目がやってきました。その渋沢栄一について真の姿を探っていくということなんですけども、多くの事績を残した人ってということではよく存じ上げられている方多いかと思うのですが、あれをやりました、これをやりました、という話ではなくて、むしろ何故そういうことに手をつけた

のか、そういうところに目が向いたのか、そういうことを成し得た人なのか、何故そういうふうに育っていったのか、というようなところからまず見ていきたいと思えます。いわゆる人間形成、渋沢栄一の人間形成というところからであります。

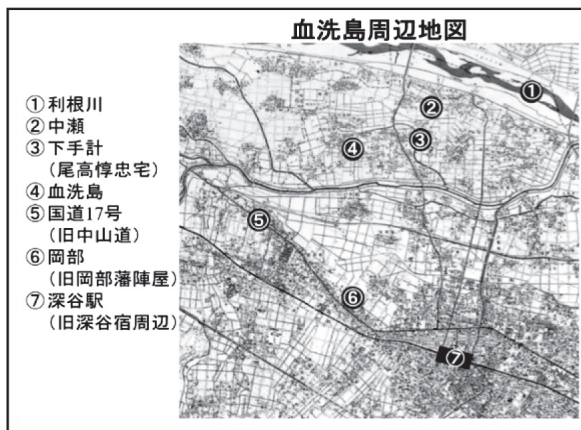
渋沢栄一91年の生涯の中から 読み取れるもの

- ・生まれ育った地域の特性、そして家
交通の要衝の地に挟まれ、貨幣経済が浸透した地域
(先進性を帯びた地域)
- 由緒、家格、経営面において村内で中心をなす家
地域のまとめ役をなす家
- ⇒ 当時の環境と実践の中で取得した経済観

往々にしてそういった部分を語る上においては、渋沢栄一の父親・母親の遺伝子、DNA、この影響というのは一番の強い要因になっていると思えます。それなくして渋沢栄一という人物は生まれてこなかったかもしれませんが、それだけに限らず、生まれ育った環境、これが渋沢栄一という人物をやはり育てていった、また創り上げていったと思えます。そういったところからお話をさせていただきたいと思えます。

まずは生まれ育った地域、そしてその家というようなところになります。渋沢栄一が、生まれましたのは1840年、天保11年、江戸時代もう間もなく終わりを告げようかというような時に、この世に生を授かったわけなんですけども、1840年というと中国では阿片戦争が起こった年なんです。西欧列強の脅威がアジアに押し寄せてくる、また

その脅威が間もなく日本にも押し寄せてくるのではないか、というようなことで非常に不安な雰囲気が漂う中で渋沢栄一は生まれました。ちょうどその頃から脅威を何とか排斥しよう、排除しようというような思いで外国籍の人たちを排除する運動、攘夷という考え方が生まれ、そして広がりつつあったというような状況下でもありました。



渋沢栄一は、当時の地名で言いますと、武蔵国榛沢郡血洗島村というまた物騒な名前の村に生まれております。現在の埼玉県深谷市大字血洗島というところになります。群馬県との県境を接する北関東の農村地域の一農村の農家の長男として生まれているのです。農村地帯と言うと、何の予備知識もなく聞いてしまうと、農作に明け暮れし、そこで苦勞に苦勞を重ねる中において何かしらきっかけを掴んで成功に導かれていく、そんな人生が描かれるかもしれません。果たしてそうだったのかということなんですけれども、血洗島の村の北に利根川が流れています。農村地帯の中に悠然と流れる大河。当時、この川というものは、物資輸送の大動脈を成していました。まだまだ陸上輸送が盛んでないこの時期は船を使った舟運が中心でした。その折の大動脈が村の北を流れている。また川筋には、その積み荷を上げ下ろしし、それを取り扱う多くの商店・問屋が建ち並ぶ非常に栄えた町場がありました。中瀬という所に、この地域における大きな河岸がありました。まず村の北に中瀬という大きな河岸、そして大動脈利根川が

あるというところを押さえていただきたいと思います。

そして村の南に目を移すと、国道17号、これは江戸時代の中山道ですね。これも大動脈、江戸時代の主要街道の一つでもありました。その街道筋には宿場というのがあります。深谷駅周辺に深谷宿があったと想定できます。渋沢栄一が生まれ育ったころ、深谷宿の人口は約1900名とされており、本陣1、脇本陣4、そして旅籠が80数軒あって、近江商人が土着したとも言われるような問屋、商人が集結をしまして、多くの商店が立ち並ぶ、これも非常に栄えた町場でもありました。

今申し上げた通り、農村地域にあって、交通の要衝の地であり、また地域経済の要衝の地に挟まれた場所であるということで、人や物や金が絶えず行き交う。それだけに限らず、それに付随して様々な情報が行き交うというような地域でもあったということになります。

農村地帯とは言っても、米がほとんどとれない、出来ない地域でもありました。江戸時代は主たる税を米で納める「米社会」といわれる世の中において、この地域一帯は岡部という小さな藩に属していたのですが、その領主、安部(あんべ)という領主は、米で納めることが出来ないということからいち早く金銭で税を納めるシステム、「金納」のシステムを取り入れていたので、早くから貨幣というものに慣れ親しんでいる地域でもありました。そして農家も安定した耕作地が得られないということから、これも農作だけでは生業が立たないということで、諸職業に手を出し、養蚕が非常に盛んに行われる地域でもありました。

もう一つ特徴があるのは、藍染めに使う藍の葉が多く採れる地域。武州藍というふうにいわれておりますけれども、藍の葉を買い集めて藍玉という団子状の染料を作りまして、信州・上州の紺屋(こうや)に売りに行く、これが非常に財をなす元に

なっていたわけです。

今申し上げたとおり、農業だけではなくて商業、工業、諸産業が集約するところになります。一農村という言葉で一括りに出来ない、一種独特の先進性を帯びた地域だからこそ、近代化を推進させた渋沢栄一というような人物が生まれてきたといっても過言ではないということをおさえておきたいと思います。

さて、その村の中にある渋沢栄一の家になります。血洗島村というのは大体5軒ぐらいの家で開かれたと言われています。そのうちの4軒、福島・笠原・吉岡・渋沢というのがその後も受け継がれ、その内の1軒が渋沢栄一の生まれた家です。村の中において由緒ある家として非常に重きを置かれる家でした。そして渋沢栄一の父親、市郎右衛門が村の名主見習いという役割、村全体を取り仕切るような、全体を見渡してそれを上手くリードしていくような役割を担う人であった。そういう父親の後ろ姿を見ながら育つ。そして村全体を見渡して取り仕切るだけでなく、自分の家の経営にも非常に長けた才能を発揮した人でもありました。

栄一の父親は本格的に藍玉の商売を始めまして、渋沢の生まれた家を、村で1・2を争うような非常に富裕層に育てあげた人物でもありました。とても厳格な父親だと言われています。道義・道徳を重んじて真面目に忠実に職を遂行する、それが右肩上がりでの急成長に導いていった。由緒ある家、そして名字帯刀が許される格の高い家の長男として生まれた渋沢栄一ですから、生まれた時から周りから注目を浴びる、リーダー格として育っていくような環境がそこにも存在したと思います。実際に父親が始めた藍玉の商売を、渋沢栄一も13歳～14歳ぐらいから手伝いました。

渋沢栄一の家における藍玉の商売状況を見ていきますと、いろいろなお客さんがいたというようなところが見てとれます。平均してみると、1件の紺屋での売り上げはだいたい1年で100両ぐ

らいだというふうに想定できます。取引先がだいたい100件ぐらいと仮定することができまして、1年に1万両というような売り上げをみることが出来ます。今に換算すると億に近いような年商の家柄であったということで、まさにこの藍玉の商売をもって財をなしていくところが見てとれます。

その家業は右肩上がりでの成長し続ける、またそれを着実に進めていった父親の後ろ姿、背中を見て育った渋沢栄一は、決して経済学を身に付けてそれを実践に移していったというような人物ではなくて、まさに家業を手伝う中において、実践を通して経済、商売といったものを身に付けていったと思います。

渋沢栄一91年の生涯の中から 読み取れるもの

・独特の学問享受

尾高惇忠による特徴ある読書法で培われたもの：
旺盛な好奇心、鋭い洞察力、柔軟な思考、
広い視野(総合的判断)

⇒ 幅広い情報収集から指針の決定
的確な情報発信

ただ、そうは言っても、学問、教養の必要も迫られるような家柄の側面もありました。満年齢でいくと5歳～6歳ぐらいから、まず父親に漢籍の類を教わったというふうに言われておりますけども、1年ぐらい経ったところで隣の下手計村というところに10歳違いの尾高惇忠という学者肌の従兄弟がいて、その人物から教わればいいということで、毎日日参するようなかたちで、渋沢栄一は尾高の家に通って学問を教わっていくことになります。

この尾高の読書法が、渋沢栄一の人間形成において大きな影響を与えていたということをお伝えしたいと思います。当時、読書法を授けるといって、決まった漢籍の類でもある書を素読させる。そしてしっかり解釈を加えて、一字一句暗記させるというような読書法が主だった中において、尾

高は「ここからここまでのことについてはだいたいこういうことが書いてある」と言い、概要を伝えます。あとはしっかり自分で読んで理解を深めるというふうにしたのです。それは、講義を聞いてなんとなくわかったような気持ちで先へと進むのではなくて、自分でそれを徹底的に追求し続けて、わからないことがあれば自分に質問すればそれについては答えるということで、そういう読書法を授けて、まずは自分の力で内容を読み解いていく、理解を深めていく、そういうふうな手法をとっていた。そしてもう一つは、とにかく前へ前へと進む、次から次へといろいろなものに目を向けさせるというような読み方をしていった、数多くの文献に触れさせるというような読み方をしていったというところがあります。与えられた漢籍の類だけではなくて、興味関心のあるものだったらなんでもいいぞというようなことで、多くの文献に目を向けさせた。渋沢栄一も非常に読書好きだったので、貸本屋などに足を運んで、南総里見八犬伝のような小説の類も読みました。中国や日本の歴史書の類も数多く読んだというようなことを言っております。また、生まれたときに攘夷というような考え方が徐々に広まりつつある世の中において、攘夷に関する文献に徐々に染まっていくというようなことが見てとれます。

いろいろなものに目を向けさせたこの読書法が、どういうふうに渋沢栄一に影響を与えたのかというと、あれも知ってやろう、これも知ってやろう、聞いてやろうというような、非常に旺盛な好奇心が養われていったところがあると思います。そして、いろいろなものに目を向ける中において、これはというものをきちんとつかむ、見抜く、そういう力、鋭い洞察力が培われていった。そして、いろいろな分野の情報に目を向けられるようなことになって、それについて柔軟に対処できるべく、やわらかい頭が備わっていった。そして最後に、やはり広くいろいろなものに目を向け

る。一点を深く追及し続けるのではなくて、ちょっと頭を上げて周りを見渡す、そういうような広い視野を持つ、その広い視野のなかで得られる幅広い情報のなかから総合的に自分なりの指針を導き出すというような判断基準が得られていった。そういうような人間形成がされたからこそ、後の多くの事績にうまくつながられていったのではないかなと感じる次第です。

渋沢は学問好きが高じまして、いろいろな分野にも目を向け始めました。そしてさらに深めたいということで、江戸への遊学を父親に談判して認めてもらうことになります。海保漁村という漢学の塾に学びました。また、千葉栄次郎が開いたといわれる道場で剣術を学んだりもしています。より深く学問を追求する、そして剣術を習って強くなるというような気持ちがあったのは間違いないところですけども、それ以上に、渋沢からすると、一地域で思い描いている自分の考えをいろいろなところからいろいろな考えを持った人たちが集まってくる塾や道場において意見交換をする中で、自分の考え、血洗島周辺で思い描いていた考えの位置づけをきちんと標準化できるというようなところもあって、この遊学を願い出たと思います。いろいろな人との交流のなかで思い描いたのは、同じような思い、同じような考えを持つ人たちがずいぶんいるのではないかと。なんといっても攘夷の考え方、特に経済的な観点からの攘夷思想というのが強く意識の中に芽生えていました。

渋沢栄一91年の生涯の中から 読み取れるもの

・不条理に対する反発

「官尊民卑の打破」の芽生え、経済的観点からの攘夷

* 合理主義(近代)的思考・未来志向の醸成

⇒ 暴挙の企て、そして中止

(高崎城乗っ取り、横浜外国人居留地の焼討ち)

もう一つは士農工商という身分制度に関連してのもので、事あるごとに領主から御用金を仰せ付けられる。税は税として納めているが、それ以上に、特に富裕層を狙い撃ちするようなかたちで、いとも簡単に日頃から汗を流して得られた益を搾取される。武士・役人が、ただ身分に甘んじるだけで、自分たち生産者側の努力をまったく無視したかたちで搾取する、これに非常に不条理なものを覚えてしまいます。官が尊ばれて民間が蔑まれる、そういう世の中をなんとか打ち破らなければいけない、そんな思いがどんどん強くなっていきました。このへんのところ、やはり近代化を目指す渋沢の未来志向の醸成というのがみてとれます。

その不条理なものを排除していこうということで、江戸で知り合った仲間、そして血洗島周辺の仲間を募って、何か行動を起こそうと考え出されたのが高崎城の乗っ取り、そして横浜の外国人居留地の焼き討ちというような計画でした。尾高惇忠という学問の師の屋敷、その二階で議論を戦わせました。学問の師匠・尾高惇忠、従兄の渋沢喜作というような人物もそれに参加していました。だいたい70名くらいで行動を起こそうということになりました。

父親が得た利益、それをごまかすようなかたちで、だいたい150両くらい騙し取って、江戸へ出たときに武具を調達して、先ほど言った中瀬の河岸まで運び込んで、蔵の中に隠し、着々と準備を進めました。そういった中において、従兄の尾高長七郎という人物から問題提起をされました。同じような思いをもって、同じような行動をした人たちが幾人も見てきたが、それによって世の中が改まったとは思えない。攘夷も意を表されているとも思えないというところで、何が行われたかという、そういう行動に出た人たちが無駄に命を落としているところしか見てこなかったと。その問題提起にて、情報というものに敏感になってい

た渋沢は、やはり一石を投じて何かしら波風を立てさせて影響を与え、今後より良き道に進むのではないかというように思っていたけれども、そこで命を落としてしまって、本当に自分たちの思い描くような世の中に導けるのかということに疑問を感じた。そこで冷静になり、そうであるならばここで命を落としてその姿を見ずにして終わるのではなくて、本当に望むところは、この体制の中にどんなかたちでもいいから残る、生き残る。そういう中において自らが世の中を改める、という考え方に至り、結局のところは暴挙を中止にしていきました。そうはいつでも当時の警察権力からはもう目をつけられていました。しばらく身を隠さなければいけないということで、喜作とともに出奔したのです。

渋沢は出奔して村を出るのですけれども、ただ農民の姿で身を隠すといってもすぐに捕縛されて命を落としてしまうかもしれないということで、一案を講じました。江戸に遊学しているときに渋沢たちに目をつけていたのが一橋家の用人だった平岡円四郎という人物です。自分の家来にならないか、ひいては一橋家の家臣になれということをお願いしていた。それをずっと断っていたのですけれども、いざ自分たちが根無し草のような状態になったところに鑑みると、その誘いをうまく活用しようということで、平岡の屋敷を訪ねて、まずは家来という、いわゆる名目をもらう。また腰に日本刀を二本差して、武士の格好をして西へ西へと旅をしたのでした。

そしてたどり着いた京都において出会ったのが、一橋家当主であった慶喜です。正式に家臣となり、そのあといろいろな役割を忠実にこなしていく。そして能力の高さを認められ、本当に目をつけられていきます。一橋慶喜は、当時、禁裏御守衛総督という御所を守る役割を担っていましたが、兵力を増強させなければいけないということで、渋沢は、まず領地内の農民に声をかければ充

分兵を集めることができると、自分はしかも農民出身であるし、それに役割を与えてもらえればお互いの気持ちを通じ合って、その役割を果たせませよ、というようなことを進言しました。自己アピールもあって人選御用の役割を担わせてもらいました。その人選御用では、平岡からつけてもらった渋沢栄一改め篤太夫、渋沢喜作改め成一郎の名前が記された「持触」という書類を持って、領地内を歩いて行きました。

渋沢は、行く先々においていろんな難題に直面します。無視されるようなところもありました。それをきちんと紐解いていって、原因を追究し、説得し、なんとか農兵の募集は成功裏に導けました。

ただ、与えられた役割を担うだけではなかったのです。渋沢はやはり情報に敏感であるということで、行く先々においていろいろなところに目を向けています。最初、関東一円を巡ってまいりましたが、そのあと西のほうの領地にも行きました。今の兵庫県、播磨の国において、木綿が多く採れる地域があり、一橋家の領地内の農民は、大阪の商人と直取引をしていて、安く買い叩かれている。ちょっと目を転じると、姫路藩は藩としてひとつの仕法を組み立てていて、農民からそれなりの額で買い取っている。そうすると農民も生産意欲が湧いてより質の高い大量の木綿を採取できる。同じように手掛ければ、一橋家用の質の高い大量の木綿、それが特産になるのだということを説明するわけです。それによって地域が盛り上がる、栄える。また一橋家の財政を潤すことになるのだと進言をしました。

また、米の質が高い。年貢米として全部流すだけではなくて西宮、灘といったところに有望な酒造家がいる。その酒造家に売るということを考えればさらにその酒造業が発展し地域が栄える。そして一橋家の財政を潤す。硝石という火薬の製造所をしっかりと作って商品化、製品化することに

よって財政を潤すことになるということで、財政政策案を次から次へと立案していく。財政政策をしっかりと理解していて、非常に優秀な人物であるということで、どんどん重用されていきました。

渋沢栄一91年の生涯の中から 読み取れるもの

・渡欧体験 ⇒ 思想の転換、「新社会」との出会い
西洋の生活習慣に触れる
開削途中のスエズ運河の大工事：「公益」を感じる
整備されたインフラ等視察：「合本法」を知る
パリ万博を観る：盛大さ・各国の出品物に驚嘆
日本の出品物の好(高)評価に喜び
ベルギー国王のトップセールス：真の国力の意味を感じる
⇒ 人生の大転換点

そうこうしているうちに慶喜が15代将軍になります。慶喜による将軍職務が扱われるその前から、1867年パリの万国博覧会が開かれるということでナポレオン3世から招請状が届いておりました。

使節団を派遣する、出品をするに当たり、慶喜が国を離れることは非常に危険であるということで、水戸にいたまだ13歳14歳に満たない弟・昭武を名代に立てて、使節団を組むことになりました。その使節団の庶務・会計係として渋沢栄一が抜擢されましたが、非常にいいポジションを与えられたと思います。

ただ、ついこの間まで「攘夷、攘夷」と、外国籍の人を見たら切り捨てるのだ、みたいなことを言っていた渋沢なのですが、「ヨーロッパに行け」と言われると、「はいわかりました。」とすぐに受けているところが、なにか節操のない人物にも見て取れるかもしれません。けれども、その辺が先ほどの尾高の学問享受を経た影響かと思われませぬ。柔軟な頭の持ち主として、いつまでも過去の考え方に縛られるのではなくて、いざ体制の中に残ってよりよい社会を築こうと思った時には、より先を行っている先進国の文明文化にも触れてみたいというような思いに駆られるようになって

いるところもありまして、思想の転換が計られていました。柔軟性という点では、現地において和装から洋装に変える、鬘を切りますが、一緒に行ったメンバーからするとそれはなかなか耐えられず、応じないところがあったのですけれども、それを率先して受けている。まさに、柔軟なその姿勢から、現地において同化する、「郷に入れば郷に従え」で、その同化する中から多くの情報が得られるのだ、そんな思いをもって、率先してこういう行動をとっています。

使節団は横浜を出発して各地を転々としつつ、2か月ほどかけてパリに到着しました。そのときの記録は、『航西日記』という形で明治になってから出版されますけれども、そのときの記録を読んでいくと出発準備の様子から船の中での様子、ヨーロッパ滞在中の様々なことが書かれています。

その中において一つご紹介したいのは、スエズ運河に差し掛かった時のことです。彼らが通過したときには、スエズ運河はまだ開通してなかったのです。スエズからアレキサンドリアという所まで600キロほどの距離を、鉄道で移動しています。こんな輸送・交通手段を、ゆくゆくは日本にも必要なんだということを強く感じています。渋沢の事績を見ていただいても、いち早くその鉄道の敷設などにも着手しているところからすると、そのときの影響が強かったと思います。その車窓から見えた大工事、これはどこの国の政策かと思って見ていたようですけれども、これはレセップスというフランスの人物の会社が請け負ってやっている仕事だということがわかります。大資本家の事業主は日本にもいました。ただ、その一事業主がこういう事業を請け負ったところで自らの資本だけでこれだけの大事業はなかなか成し遂げることは出来ない。多くの人から資本を募る、それを集めることによって大資本化をはかり、組織体を作り、それがこういう事業を成し遂げられる基になっている。それは一事業主の事業ではなく、多

くの人々の事業として位置づけることが出来る、そういったところにも目を向けていました。

もちろんこれを引き受けたレセップスに大きな利益をもたらすことは当然のことではあるのだけれども、それ以上に、これが開通した折には、全世界のありとあらゆる人に大きな利益をもたらすのだということを渋沢は感じます。ヨーロッパからアジアに移動するにあたっては、当時はアフリカ大陸をずっと巡っていかなければいけない。その時間、労力、経費それをいかに削減出来るか、大きな利益をもたらせる基がここにあるということで、公益の追求者として後に語られる渋沢が、公益というものを意識したというその原点がスエズ運河にあったかもしれません。

パリに着きます。フリーリ・エラールという人の案内で市中をいろいろ案内してもらいました。名総領事だったフリーリ・エラール、もともとは銀行家だったのです。最初、銀行に案内されます。その他名所旧跡の他に例えば、株式取引所だとか、近代的な設備が整った病院だとか福祉施設だとか、学校教育の現場、研究所や娯楽施設等々を見てのわけです。また、道の下に道があるということで、そこにはガスというものが通っていて、そのガスによって灯される火が夜でも昼のように明るい。このような設備の必要性を感じ、また、水道設備が整っているなど、まさにインフラが整備されているところを見聞しています。ただ新しい施設、設備に目を向けるだけではなくて、そういうものがどのように経営維持されているのかというところをしっかりと学ぶところがありました。先ほどのレセップスの会社にしてもそうですが、資本を合わせる、それによって大事業がこうやって成し遂げられる。それから得られる利益を、出資してくださった方々に公平に分配される。それを渋沢栄一流に「資本を合わせる」と書いて合本の仕法、そしてそれによる合本組織が日本にも必要になってくるのだということを強く感じていました。

渋沢は、パリの万博会場にも足を運んでいます。当時としては最先端の技術、全世界から集まってきた盛大なこのお祭り、祭典というものに対して非常に圧倒されています。技術面においてはあまり関心を持っていなかったのですが、アメリカの農機具、そういった物に目を向けていました。

また、庭園部分に日本が出したお茶屋がありました。そこで非常に多くの人の目を引いたのが芸者がお茶を振る舞う光景でした。和装姿の女性に非常に多くの人たちが群がっていて、渋沢栄一は何で目が向くのか非常に驚いていたと言っています。もう一つは、出品物への注目です。例えば、浮世絵の類、陶磁器の類。日本の伝統文化というのは、初めて出品されたわけですが、非常にヨーロッパにおいて注目を浴びている、高い評価を得ている。極東の一小国の文化も決して侮れない評価、高い評価を受けて、表彰式においてもグランプリを得られるということで、渋沢栄一は喜びを待ち、また誇らしげにそれを語っています。

その後、ヨーロッパ各地を巡っています。ベルギーを訪ねたときにベルギー国王が、「これからの近代化、産業化が進められる各国において鉄が必要になってくる」「日本においてもそういう時期が来るだろう。その際には製鉄国ベルギーの鉄を買ってほしい。」と口にし、今で言うトップセールスが行われたのです。渋沢からすると国王自らが商売のことに口を出すという全く信じられないような光景がそこにありました。でも国を強くする、国力を増すということは決して政治の力、軍事の力ではなくて基盤となる経済の力、それに基づいたその産業の振興によって国力というのが増されていく。それは官も民もないんだと、一体となってそれを考える。まさに渋沢からすると理想的な姿をそこで見出しました。

本来であれば昭武の留学も絡んで4、5年向こうにいる予定だったのですが、大政奉還になって、また昭武が水戸藩を継がなければいけな

いということで帰国してまいります。

渋沢栄一91年の生涯の中から 読み取れるもの

・民間の立場で産業振興を考える
静岡で「商法会所」の立ち上げ

⇒日本における「合本法」の実践

最初に向かったのは静岡でした。なぜ静岡かというと、宝台院という寺院に將軍職を解かれた慶喜が蟄居状態、軟禁状態だったのです。そこで、慶喜のもとを訪ねます。無事の帰国の報告と合わせて、もう役人になるつもりはない旨、世の中を潤す基、繁栄に導く産業振興の事業に従事したい旨を伝えました。また、慶喜を本当に信奉していた渋沢からすると恩義を感じていた慶喜の身近なところでその事業に携わりたいということで静岡に骨を埋めるような気持ちでもあったわけです。

当時、新政府は各藩に貸付金をしておりましたが、静岡藩は53万両を借り受けていました。渋沢は役所に行って、年3分の利子で13カ年賦返済とのことであるが、きちんと返済する仕法を考えているのかということを探りました。そして、もし預けてもらえるのであれば、自分は合本組織による事業を会得してヨーロッパから帰国したので、その資金を元手に、一つの事業を興したいと進言しました。早速、商法会所というものを立ち上げるということでその規則書、いわゆる会社の定款のようなものを用意していたのです。その商法会所は今で言う銀行業務、商社も兼ね合わせたもので、大半は政府からの借入金で成り立っているのですけれども、静岡藩も出資し、静岡藩の市民も出資したということで、非常に原始的なんですけれどもここで会社組織的なものが立ち上がったということになります。

帰国して数ヶ月後には、こうやって具体的な形に出来るっていうところでは、渋沢栄一の能力の高さが見て取れると思います。

**渋沢栄一91年の生涯の中から
読み取れるもの**

・官の立場での新たな国づくり
民部省 改正掛の掛長

⇒近代経済社会の基礎づくり

その能力を放っておかなかったのが明治政府でした。明治2年11月、民部省租税正ということで、今で言う主税局長のような役割を与えられます。渋沢は租税のことを全く知らないわけではなかったのですけれども、そういう知識の無い私に役割を与えるのはいかなものかということで上司であった大隈重信に直談判に行きます。産業の振興に務めたい、静岡で一事業を行ってようやく軌道に乗りかかったところなので早く静岡に戻してもらいたいというようなことを言うわけです。けれども、大隈は大隈で、今のこの世の中において静岡で起こした事業が全国に伝播するのはとても考えられないと。そのためには今、全国においてそれが広がる基盤を整えなければいけない。政府においてそれを整えられる精鋭たちを集めているので、その1人となってもらいたいと告げ、渋沢を積極的にスカウトしたのでした。

渋沢は、役人になるということではなくて、新しい世の中をつくるのに参画できるという意味では非常に意義を感じて明治の2年から6年まで明治政府の役人として一時期を役人として過ごします。

ただそのときに与えられた租税の関係だけを担うのではなくて、精鋭たちが集まって何をするかを考えて、その為に調査をし、その調査に基づいて建議案にまとめる、実際に形にしていくというような、今でいうプロジェクトチームのような

ものを作ってもらいたいと進言しました。そうして設けられたのが「改正掛」というものであります。その改正掛の掛長として渋沢栄一は全体を取り仕切っていくことになります。

改正掛は、二年しか存続しなかったのですが、いろいろなプロジェクトに手を付けています。その二年間で扱った案件が約200件。今の我々の生活のベースになる部分は、形は後になるにしても、ほとんど手を付けたといっても過言ではない。その道のエキスパートを呼び入れて、着実に形にしていっていったようなところがあります。例えば、貨幣制度、銀行制度といったものの条例を形にしていっていったのです。また、会社を立ち上げる際に必要なマニュアル本のようなものも発刊し普及させていきました。あと生糸の輸出高が世界一位になる。安定した品質で大量の生糸が生産できるような大工場を作らないといけないということで、富岡製糸場も、改正掛の発案の下で動き出していきました。

明治の文明開化の様子を描いた様々な錦絵、そういった中で、この改正掛が成し遂げた仕事の数々が、例えば鉄道の敷設、銀行の設立、郵便の開設等々描かれています。まさにその近代国家を形作っていったところの中心を担ったのが渋沢、そして改正掛のメンバーであるということになります。

政府の中には、まだまだ富国強兵の、強兵の部分に力を入れる大久保利通のような人達がいて、とにかく各省庁から自由に予算要求をされる。歳入と歳出のバランスを考えろというのが、渋沢の考えでありました。それによって経済という基盤を確立することによって、日本というものが成り立ち、そして国際社会に打って出るということができていくんだということを強く主張するのですが、なかなかそれが聞き入れられないということで、自分の上司であった井上馨とともに面白くないということで辞表を叩きつけるような形で辞してしまいます。

渋沢栄一91年の生涯の中から 読み取れるもの

・民間でのインフラ整備

金融基盤を確立させ、多業種の企業を設立・育成
生涯関与した企業数：約500

⇒近代経済社会の基礎づくり

インフラ整備から「合本法」「道徳経済合一説」の
実践、普及

その後ずっと民間を貫き通したということで民間の立場でインフラの設備に着手していきます。

最初に手掛けたのはやはり金融基盤。産業の振興のためにお金の流れをしっかりと確立させなければいけないと、金融基盤の確立ということで、改正掛で着手していた国立銀行条例の下で立ち上がった第一国立銀行、今のみずほ銀行になります。これの立ち上げに奔走し、非常に困難な道を歩みました。国の政策も途中で変えられたりもしましたので、資本を投じてくれた小野組が破綻したりで窮地に立たされました。出資者には、懇切丁寧に説明し、信用を得て無配の状態に耐えてもらいました。また、改革にむけて増資に応じてもらい、なんとか数年後にこれを軌道に乗せることができました。

その後、これからの世の中に必要な事業を会社組織でということ、ありとあらゆる事業に着手していきます。陸運もあれば、海運、保険、アパレル業界、そしてサービス業のようなものにまで目を向けて、本当に世の中全体を見渡して事業というものに着手していきます。

渋沢栄一が生涯関係した会社の数は約500といわれます。一人の人間がそれだけのものに全部目を向けることができたのか、手をつける事が出来たのかと疑問に思われる方がいらっしゃるかもしれませんが、渋沢は、これら全部を自分のものにしなかったのです。独占しなかった、財閥を築こうとしなかったのです。事業自体を世の中に定着させるということをお大前提に考えていたのです。優

秀な人材が育ち、事業が軌道に乗れば自分は持ち株などを売却して次の事業に投資していくという形でそれを展開させていきました。

その考え方に真っ向から反発したのが三菱の総帥・岩崎弥太郎でした。明治11年、考えの違いで袂を分かったというようなところもあります。渋沢は、岩崎とは私的な部分では昵懇であったと語っています。言われてみれば保険業務などは、同時に手を出して、最初から手を組んでいたところがあります。ただ、岩崎の独占をなんとか阻止しようとして、それに対抗していったところも渋沢にあったのです。

渋沢は、個別の企業を育てるだけではなくて、いわゆる企業間の意見交換の場の設立に取り組みました。それは世の中における民意の結集、世論の形成に繋がる。そういうような機関は、産業の振興に繋がるという位置づけで、今日の東京商工会議所の原型となる東京商法会議所を設立しました。その他にも、様々な団体を作っていく。個別の企業だけでない財界というものを形成していこうというところがあったと見て取れます。

☆近代経済社会の基礎づくり：官・民での インフラ整備 ⇒ 産業振興を目指す

↓↓↓

* 日本国際化と平和の推進

* 社会福祉の整備

* 教育・文化の整備

渋沢栄一は明治の42年、1909年、古希を迎えたときに、ほとんどの役員をリタイアして後進に道を譲っていきます。ただ、そのあとも、あくまでも産業の振興を目指すということはゆるぎないところでもありました。そうしたところで何か相談事があればそれに応じていたような姿も見取れます。

実業界にいる時から、民間外交だとか、福祉だとか、教育だとか、そういう側面に目を向けて手を付けていたのは間違いありません。ウエイトが大きくなってこの三本柱が晩年の渋沢栄一の仕事となってくるところがあります。本人もそういうふうに言っています。これは産業振興を目指す自分の考えを貫き通すうえにおいて阻害する要因をなんとか払拭する、そのための事業であるというようなことでもありました。

1つは民間外交、代表的な事例として渡米実業団という51名からなる団を率いて、団長としてアメリカに渡ります。約60都市を3か月間かけて巡ります。現地の人と向かい合って語り合い、お互いの考えが理解しあえば、明治の末年にかけて非常に日米関係がギクシャクしたのですが、それをなんとか解決出来る、いい方向に導けるのだというような思いでそのような行動に出ていきました。

実際に現地アメリカの実業界においてもそれは受け入れられたのですけれども、アメリカにおいては移民というものを排斥する運動の中で、日本から渡った移民を全面的に排斥する排日移民法が1924年成立してしまいます。渋沢は非常にショックを受け、またアメリカとの関係を断たれてしまうのではないかという強い思いに駆られてしまいます。渋沢は、日米関係の協調なくして日本の経済発展はないということを強く思っていました。その関係をなんとか維持し続けなければいけない、改善に向かわせなければいけないということを感じていたのですけれど、それがなかなかならなかった。排日移民法の改正などにむけて民間の団体を組織して奔走するのですけれども、それが思うようにいきませんでした。

それならば今の時代だけではなくて、将来に向けてそれを担う人間に平和の念を受け継がせる、そういう行動に出た方がいいと思うようになりました。アメリカの宣教師シドニー・ギューリックが、

「日本には人形を愛でる風習があるから、子供たちに平和の念を訴えるために、人形をプレゼントしよう」と発案し、アメリカの優良人形12800体が日本に送られました。その日本側の受け入れ手の代表を務めたのが渋沢でした。それを受けて日本から1県1体を旨とする答礼人形をアメリカに送り返すということで、日米の人形交換をもって草の根の交流を図っていく、そして平和の念を受け継がせていこうという意図がありました。

渋沢栄一にとっての民間外交、国際理解

- ①日本の立場・位置づけの明確化
- ②平和こそ、産業を振興し人類の幸福を増進する道
- ③人間性と正義の原則は国際関係において有効、商工業の利益と合致

アメリカだけではなくてアジアやヨーロッパの人たちとの交流も非常に盛んに行っていました。渋沢栄一からするとこの民間外交に力を入れる目的、それは当時戦争によって経済発展につながるのだということを主張する人々がいた、それを真っ向から反対するところから始まっています。なんととっても産業を振興し人類が幸福な生活を送る、その増進が図れる、その道筋をつける為にはなんととっても世の中の平和、これを望まなければいけない、そういう世の中にしなければいけないのだということを主張し続けました。だからこそ民間外交をもって、なんとか政府間レベルを補う意味で平和の念を訴え続けました。

もう1つは日本という近代国家、これが先進国とようやく肩を並べられるようになった。そういう国の位置付けを、国際社会の中に定着させたい、そういう思いからこの民間外交に力を入れていったと思います。

そして次に、取り上げるのが社会福祉事業。明治5年に、東京の困窮者を救うということで、養

渋沢栄一91年の生涯の中から 読み取れるもの

・社会福祉の整備
東京養育院を中心に

⇒ 偶然から必然の事業へ

育院というのが設けられます。渋沢栄一はその設立のときには係わっていないのですけれども、その2年後から財政的な面倒を見る。そして明治12年から、初代の院長となって事業全体に係わるようになっていきました。

渋沢栄一が産業の振興に奔走し続けて、それがようやく花開いて来るのが明治の20年代、30年代。数多くの会社が立ち上がり、それが軌道に乗り、経済発展が見られるようになった中において、同時に現れてきたのが貧富の差、格差というもの。日常生活についていけないような人々、地方から人々が都市部に流入する。地域における疲弊が見られる。また貧困層が町の中に溢れ出るといようなことに至って、この養育院の収容者が、スタート時点から明治の20年代、30年代になってその数が倍増してしまうことに対して、渋沢は自らやって来た経済発展の為の努力が何だったのかと自分の中でジレンマに陥ってしまいます。ようやく気付くのが経済発展の為の経済政策だけを推進させていたのではなかなか本当の意味での発展には繋がらないのだと。より良い社会を築く上においてはそこから溢れてしまうような困窮者の人達まで手を差し伸べて格差を無くしていく、全体を上手く取り纏めてより良い社会を築いていかなければ、本当の意味での経済発展、本当の意味でのより良い社会にはならないのだということに気付き、それにむけて奔走し続けます。

養育院の院長は、亡くなる年までずっと続けました。銀行より長く続けているのです。福祉の重

さというものを非常に強く感じているところがあります。

渋沢栄一の社会事業への想い

- ①偶然から必然の事業へ
・東京会議所会頭として事業担当
→将来を視野に入れて、施設・事業の必要性を説く
- ②松平定信への敬慕
・「社会事業の先駆者」としての位置づけから
- ③「社会事業は私の義務」
・救護法の施行にむけての行動・発言

自らも偶然の出会いだったというところがありますが、まさにその財政的な面倒を見る中において、偶然にその福祉の事業に出会っています。ただその事業自体が世の中にとって本当に欠かすことの出来ない必然の事業だったんだということに気付かされます。それに没頭し続けていった、その必要性を説き続けていった人であるということ、そして、晩年には、社会事業は私の義務であるというような言葉まで発するところまで至っていたことをお伝えしたいと思います。

渋沢栄一91年の生涯の中から 読み取れるもの

・教育・文化の整備
実業教育：商法講習所（現・一橋大学）
女子教育：東京女学館、日本女子大学校

⇒ 国づくりのための人づくり

最後に1つお伝えしたいのが、新しい世の中を築くにあたっては人を作らなければいけない。政府の方でも目を向けていた教育事業の改革なんですけれども、江戸時代からの弊習であった商業蔑視観が拭い去られず、商業教育、実業教育、まさにこちらで行われているような産業教育の部分が手薄だった、目が向かなかったのです。そして女性の高等教育、ここにも手を付けていきました。

その出発点が、森有礼が開いたといわれる商法講習所。渋沢栄一は、そこを起点に東京高等商業学校を文部省の軋轢を何とか克服して大学昇格まで導きました。それから女子教育においては、まずは社交界で通用する女性をとということで女子教育奨励会の実践校たる東京女学館、その館長、理事長を務めます。また女性の総合大学を目指す成瀬仁蔵の強い気持ちに応えるべく後押ししました。そして自らが3代目の校長を務めて、女子教育の普及に努めました。まさにその国を成り立たせるためには人を作らなければいけない、その強い思いを持ってこの教育事業にも携わっていきま

教育への熱き思い

- ・立国の重要な要素としての認識 ⇒ 国づくりは、人づくり
- ・官尊民卑の打破、将来も視野に入れて社会の安定をめざす
- ・経済と道徳の統合、女性の役割の再評価(男性と共に活動する環境づくり)、福祉を重視する社会の育成、国際平和の希求

渋沢栄一が生涯関係した会社の数は約500とされると申しあげました、社会事業の方は範囲が広くなりまして、数えると約600になります。

一人の人間が1000以上の事業に携わってこの国のことを思い奔走し続けたのでした。

その人物が1931年(昭和6年)11月11日に満91歳で亡くなっております。

☆いま、なぜ渋沢栄一なのか？

渋沢栄一のとった行動規範に注目

- ・企業倫理の実践者
 - ⇒ 道徳的な考えを持って正しく利益を求めることによって産業活動を活発化させる必要性を広め、実行した人物として
- ・儒教精神(東洋文化)を貫いた人物
 - ⇒ 今後の世界を考える上で中国古典にある教えや東洋の伝統を新しい視点で見直す時に、中国古典の教えを規範とした人物として
- ・社会貢献事業の先駆者
 - ⇒ 本当の意味での社会貢献事業を実行した先駆者として
- ・リーダーシップを発揮した人物
 - ⇒ 将来を見すえ、確固たるビジョンを持ったリーダー像をもつ人物として
- ・高齢社会の模範生
 - ⇒ 最後まで自分で身のまわりのことが出来て、「愉快地生きる」とした模範的な人物として

その人が亡くなって今年で90年、決して過去の事業・事績を称えるがために注目されているのではなく、渋沢栄一が行った行動、そして放った言葉、それが今の我々に対して大きく意味あることとして受け継がれているところがあります。

企業倫理の実践者というところでは、『論語と算盤』という著作が今飛ぶように売れているということからしても、渋沢栄一の考えに目が向いているところがあるかと思えます。

その渋沢栄一は、『論語』を規範にして生きていたというところで、これからの世の中を考えた上において東洋の伝統文化、西洋的な文明を入れた渋沢栄一がずっと貫き通したその儒教精神が何かしらの意味があるのではないかということですから。例えば中国においても、儒教の儒に商人の商と書いて「儒商」という概念を広げようということで国際会議等が開かれております。この儒商たるもののモデルが日本の渋沢栄一ということで、私も何回か足を運ばせていただいております。

本質をついた社会貢献の先駆者。自分の事業自体をきちんと責任を全うする、それが本当の意味での社会貢献につながるのだということを主張し続けた渋沢の考え、これを今の社会貢献事業に携わる人々にも正しく伝えなければいけないのではないかと思います。

閉塞感に満ち溢れた世の中において一筋の光を差し伸べてくれるような強いリーダーシップを持った人を望まれる中において、渋沢栄一という人物像が非常に注目されるというようなところがあります。

そして最後に高齢化社会の中において91歳まで生きた。ただ長生きしただけではなくて、最後の最後まで自分のことは自分でやり、世の中のために奔走し続けた、またそれを「愉快地生きる」と称した人物として、今まさに超高齢化社会と呼ばれる世の中の模範生として注目を浴びているというところでもあります。

**単なる実業家でない
「近代化のオルガナイザー」、
「公益の追求者」・渋沢栄一**

・渋沢栄一の行動から見出せる信念：

政治に対する経済の優位

「公益」の視点に基づく民間の活動が、政府「官」の活動を補完するだけでなく、むしろ先導すべきものである。

⇒ 日本の発展、国際社会への貢献

2019年4月9日、新しい一万円の肖像になぜ渋沢栄一が決まりましたかということに対して、財務大臣から、日本人誰しもが知っている実業家であるからという説明がなされました。単なる実業家でないということは今日のお話の中でご理解いただければ幸いです。

日本全体をうまく組織化したそのオルガナイザーであり、なんといっても公益をまず第一に追い求め続けた渋沢栄一であるということ、官尊民卑の打破という考え方はずっと貫き通しました。ただ官と民が対立構造にあることだけを主張し続けたのではない、むしろ官と民が一体になればいけないというところを強く望んでいた人でもあります。その中において民間の人達はどうしても政府・官の方に重きを、思いを委ねてしまうところがあり、自分たちはその官の仕事を補完するような位置づけであるというようなことしか見えていない。そうではなくて、民間の人たちがむしろ世の中を引っ張っていく、リードしていくような形でなければ本当の意味での発展、本当の意味での社会への貢献につながらないんだということを主張し続けた人であるということを最後にお伝えしまして、今日のお話を締めくくりにしたいと思います。

どうもご清聴ありがとうございました。

(主な著書)

『渋沢栄一―近代日本社会の創造者(日本史リブレット人)』(山川出版社、2012年)

『渋沢栄一伝―道理に欠けず、正義に外れず』(ミネルヴァ書房、2020年)